

特集総括

都市近郊林と里山—二つの特集を振り返って

Suburban Forest and SATOYAMA : Review for the Two Special Issues

「環境情報科学」編集委員

高山範理・山本勝利・大瀧友里菜・巖 網林・杉村 乾

1. 背景と特集のねらい

国連の報告によると、2030年には人口の6割が都市部に集中すると予測されている。日本国内においては、まるで時代を先取るかのように、少子高齢化およびそれに伴う人口減少の波が急速に高まりつつある。昨今、首都圏等へ人口の集中が生じ、同時に地方の人口減少が進んでいることは読者諸氏も日々ニュースなどで見聞きするところだと思う。

この急速な人口減少時代において、国土面積の約7割を占めるといわれる森林は今後どのような姿をみせるのであろうか。国土に占める面積の割合から考えると、森林が荒廃することは日本という国全体が荒れていくことを意味している。まして、これまでわたしたちの生活を支え、利用されてきた都市近郊林や里山といわれる身近な森林がその姿を変えていった場合はどうであろうか。これすなわち、わたしたちの身近な生活環境そのものが徐々に荒廃していくことを意味していると言えるのではないだろうか。

しかし、都市への人口の集中と地方の人口減少が、身近な森林生態と、その利用と管理の現場に何をもたらしているのか、あるいはこれから何をもたらすのかについて複眼的に論じた知見は意外と少ない。これには、前号（45巻2号：多様化する都市近郊林の利用と求められる管理）で議論したように、「都市近郊林」という用語が1990年代をピークに、あまり熱心な研究対象とされなくなったこと、および本号（45巻3号：地域資源としての里山—その価値の再生に向けて）で特集した「里山林」についても、2010年の生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）をピークとして、

熱い視線が注がれなくなったこととも無関係ではないだろう。また、都市近郊林と里山林は概念的には重なることが多いにもかかわらず、個別のテーマとして扱われることが多く、その扱われ方もさまざまである。こういったことが素因となって、同じ身近な森林であるにもかかわらず、都市近郊林と里山林は、それぞれ、または相互の問題の所在と論点をわかりにくくしているような気が日頃からしていた。

そこで、「環境情報科学」編集委員会では、今回、あえて2号にわたって都市近郊林と里山林を対象とし、連続的な特集（連携特集）を組むこととした。この試みによって都市近郊林と里山林のそれぞれの置かれた状況を把握し、それぞれの抱える問題の論点を洗い出すことができないかと考えた。次に、問題を生み出している（または将来的にそうなるであろう）物象の解決方法について考える機会を提供したいと考えた。そうすることで、近い将来における身近な森林とわたしたちの新しい関係性やあるべき姿について、読者との議論が生じるきっかけになればというのが今回の連携特集の第一の目標である。

第二の目標は、上記のように、通常、こうした特集テーマでは、都市近郊林は都市近郊林として、里山林は里山林として扱われ、それぞれの用語にまつわる研究的なパラダイムのもとで論じられることが多い。そのために、それぞれの主となる研究対象、用いられる手法、スケール、視点などの対比が難しく、都市近郊林と里山林との相互関係やそれぞれの成果に対する理解、相互浸透的な知見の活用を困難にしていたように思われる。したがって、今回の連携特集において、都市近郊林と里山林に流れる研究的なパラダイムの違い

を相対化することにより、単純にその違いを楽しんでももらえればという思いとともに、都市近郊林および里山林のそれぞれの研究分野に対して、さらなる刺激を与えることになるのではないかという思いもあった。その刺激が、今一度、身近な森林にまつわる利用と管理に関する議論を喚起できれば、という狙いもあった。

2. 視座と議論

本号冒頭で山本が指摘したように、現在の都市近郊林と里山林が抱える問題点はその力点においてかなり異なっているようである。実は、連携特集の企画当初においてオーバーユース（過剰利用）は都市近郊林の問題、アンダーユース（過少利用）は里山林の問題として、利用の違いでそれぞれがくくれるのではないかと目論んでいた。しかし、二つの特集を経て結果的にわかってきたのは、場所と時代によってそれも変化するということであった〔杉村（前号）、下村氏（前号）、宮本氏（本号）、齊藤氏（本号）〕。

たとえば都市近郊林については、都市周辺に位置する森林に対する国民的な関心の高まりによって、交通の便が良い一部の著名な場所に人が多く集まり、その結果、オーバーユースにまつわる問題が引き起こされていた。新しくトレイルランニング（中距離走の一種で山野を走るアクティビティ）やマウンテンバイク、ペット同伴の利用といった、これまで存在しなかった利用方法が生じていたことも都市近郊林が抱える問題の要因となっていた。また、放置された都市近郊林で生じる不法投棄等のネガティブな利用についてもアンダーユースに関する問題として取り上げられており、都市近郊林についてはオーバーユースだけでなく、アンダーユースにまつわる問題にも目を配る必要性が明らかになった。

一方、里山林については、主に、人の手が入らなくなった里山林を今後どのように扱っていけばよいのかについて議論が行われた。本来、多様な生産・利用の場であったが、農山村住民の高齢化、人口減少、その他農村・農業を取り巻く諸問題によって、その多様な利用を調整する社会的なシステムが機能しなくなって

しまった。その結果、農地や農山村の荒廃が進み、生産および利用の多様性を失ったことに起因して、農山村における生物多様性が低下しそこから生じる生態系サービスが急激に劣化しつつあることが危惧されていた。こちらについては企画当初の目論見のとおり、バブル期のゴルフ場への転化のような一時的なオーバーユースともいえる現象を除けば、基本的にはアンダーユースの問題としてとらえることができる（写真1）。このように、ユース（利用）という側面から考えただけでも、同じ身近な森林であっても都市近郊林と里山林では、場所と時代によってオーバー／アンダーといった性格の違いや問題となる内容が異なることが明らかになった。

上記は2号を比較した場合に得られる知見の一例である。読み進めると都市近郊林と里山林の研究的なパラダイムの違いがさらに明確になってくる。たとえば、都市近郊林がわたしたち人間の利用とそれにとまなう保全の仕組みについて、現在進行形でより良い関係のありかを探る試みが進んでいるのに対して、里山林では、主に生物多様性や生態系サービスを維持する観点から、過去における関係性を手本として、現代的なプレグナンツ（良い形）を模索する試みが中心的に行われている点なども両者を視覚的に対比できとても興味深い。

また、計画論的に考えた場合、扱うスケールの面で、都市近郊林では比較的微小～メソスケールで圍繞の一立面的な視点を中心にして行われた報告が多いの



写真1 住居近くの森林が切り開かれメガソーラの設置場となった例

注) このようなメガソーラが都市近郊林、里山林の両方で急速に設置されるようになっており、近年、新たなオーバーユース（過剰利用）の火種になりつつある。身近な森林におけるメガソーラの導入は地域の自然・里山景観、生態系の劣化につながる可能性が指摘されている。

に対して、里山林ではメソ～マクロスケールといった、比較的大きなスケールで鳥瞰的・一平面的な情報を元とした報告が多いように思われる。これは、現場の状況と生態系のどちらに視座を置くかによってある程度自動的に決まってくるものかもしれないが、今のところ、都市近郊林＝現場環境の利用・保全、里山林＝生態系（または生態系サービス）の利用・保全、という図式ができあがってしまっているがゆえの構造のようにも思われる。しかしこれは反対に、ミクロ～メソスケールおよび圍繞的視点から里山林の利用や保全について考えたり、メソ～マクロスケールおよび鳥瞰的視点から都市近郊林の生態系サービスや生態系そのものについて考えたりする余地が残されていることを意味している。

今後はぜひ、これまでの研究的パラダイムと異なる方向にも視座を向け、都市近郊林と里山林のそれぞれで育んだ研究アプローチや調査分析の方法を、相互浸透的に他方の対象に向けていってほしい。そうすることが、わたしたちにとって身近な森林である都市近郊林と里山林それぞれとのより良い現代的・近未来的な関係性の発見や構築の近道になるのではないかとと思われる。

3. 処方箋と整理

今回の連携特集では、多数の論客に現時点で考えられた身近な森林に生じている問題に有効な処方箋を提示してもらえたと思う。誌面の制約もあるため、ここではオーバーユース／アンダーユースという問題を中心に整理を試みたい。

まず、オーバーユースに起因する問題として、複合的な要因によって、入込人数の増加や利用方法が多様化した結果、都市近郊林に生じた利用者間のコンフリクトが生じていた。それを解消する方法として、前号で中野氏、甲把氏らによって紹介された東京都自然公園利用ルールのような、相互に守るべき規則の作成やその広い周知が有効な処方箋の一つになる可能性がある。東京都の取り組みを参考に、問題の初期において、それが深刻化する前に公的なルールを作成しておく

という動きが、他の自治体にも広がっていくことになれば、将来に生じ得る同様な問題を未然に防ぐことが可能になるだろう。しかし、今後公的なルールによる改善が見られない場合、また、利用者間ならびに管理者・所有者を含んだ利害関係者間の合意形成がどうしても得られないような場合には、法的な手段によってゆるやかに規制・誘導していくことも必要なかもしれない。この点でトレイルランニングを条例で規制することを検討している鎌倉市の事例（中野氏）は、今後の試金石となる可能性がある。また、都市近郊林では、踏圧による植生の荒廃や盗掘などオーバーユースに起因する自然資源の保全の問題も生じている。それらの問題に対応して、現場では継続的に熱心な保全対策が講じられている（甲把氏）ことも忘れてはならない。利用者間のコンフリクトという新しい問題だけでなく、これら古くから知られている問題についても、その解消に向けた取り組みや利用者への保全意識の醸成につながる情報提供などについて引き続き強化していく必要があるだろう。

一方、アンダーユースに起因する問題として、まず都市近郊林および里山林にまたがって不法投棄の事例が紹介されている〔小山氏（前号）、齊藤氏（本号）〕ことが挙げられる。小山氏によって、不法投棄の対象となるような森林の景観的な整備が有効であることがこの問題の解決策の一つとして紹介されている。これは、森林などの自然地が景観的に整備されることで見通しが良くなり、その結果、投棄時に他者に発見されるリスクが高くなることを期待してのことであろう（写真2）。残念なことに、現状では期待したほどには効果がみられていないようであるが、犯罪心理学の分野の知見である「割れ窓理論（建物の窓ガラスが割れ



写真2 都市部にある森林が放置された例

注）都市部にあっても日々利用されない森林は管理が放置されることが多い。放置されヤブ化した森林は恰好の不法投棄や犯罪が行われる場になることもあり、そうすると地域住民にとっても迷惑な存在になってしまう。

たまま放置されていると、管理されていない場所だと思われ犯罪的な行為が増えるという理論)」の森林管理の現場への応用として、投棄しにくい環境を整備・創出するような取り組みは、有効な予防策として期待できるであろう。また、こういった環境整備は継続的にそれが維持されることに意味があるはずである。したがって、ぜひ今後とも続けてほしいものである。

しかしその一方で、大規模な面積に景観的な整備を行うことは時間的・金銭的コストの面で限りがある。そこで過去に不法投棄が生じた場所や、今後投棄の可能性が高いと思われるような場所を特定したうえで優先的に整備を行っていくことが合理的だろう。また、森林の側を整備するだけでなく、同時に身近な森林と不法投棄者らとの関係を揭示することで、不法投棄者の良心や倫理観に訴えかけたり、クリーンセンターなどの公的に整備された施設の利便性を高める、より積極的な情報提供を行う、といった対策を通じて、ごみ行政に関するガバナンスを高めたりすることも必要になるだろう。

また、同じくアンダーユースの問題として、今後、耕作地の放棄や里山林の放置が進んだ地域をどのように扱っていったらよいのかについては、それぞれの里山林の特性によってかなり将来的な見通しが異なるように思われる。たとえば、遠藤氏（本号）の紹介にもあるように、さまざまな取り組みによって交流人口を増やしたり、集落における土地利用のガバナンスを高めたりすることによって再構築が可能な農山村であれば、耕作放棄地等の規模は縮小するかもしれないが、一方で今後も集落住民を中心に農地および里山林を連続と維持・管理していくことが可能な地域もあるだろう。これについては、集落の生活やコミュニティの再構築がそのまま里山林にかかわる問題の解法になりえる。

しかしその一方で、少子高齢化および過疎化のダブルパンチをまともに受けてしまい、将来的な見通しが立たない農山村も国内には数多くある。そのような集落では既存の農地や里山林の管理をこれまでどおりに行うことはなかなか困難であるといえよう（写真3）。したがって、場合によっては、本号で徳岡氏が指

摘しているように、これまでの里山域での土地との付き合い方を見直し、農地や里山林を自然性の高い森林に誘導していくという方策についても、今後の国土管理上の選択肢の一つとしてさらに真剣に考えていく必要があるのかもしれない。

また、今回の連携特集を注意深く俯瞰すると、都市近郊林と里山林に関するいずれの問題も、森林がわれわれの日常生活から切り離されてしまい、森林とわれわれの生活に意味のある関係性を見いだすことが困難になってしまったという共通点が見られる。このような関係性の希薄化が共通して導き出したのは身近な森林に対する「無関心」である。その無関心が、ある局面では、オーバーユースで議論したように、たまに遊びに行く場所として動植物や他者に対する配慮のない行動を引き起こしたり、別の局面では、アンダーユースについて議論したように、森林に対するネグレクトやネガティブな利用行動を誘引しているのであろう。したがって今後は、物理的に身近な森林を心理的にも身近な存在として感じてもらうための何らかの方策を考えていく必要があるように思われる。現状を一気に改善してくれる特効薬のようなものは見当たらないが、周囲を見渡すと漢方薬となりそうな方策はある。とりあえずは、子どものころから自然環境に親しむ機会を増やしたり[大石氏（前号）]、成人してから癒しの場[上原（前号）]として、または多様なアクティビティの場[平野（前号）]として自然を体験する機会を増やしたり、あるいは、冬季の暖房用にペレット



写真3 管理放棄された里山林にシカが出没した例

注) 従来、奥山とのバッファーであった里山林の放置が進んだ結果、都市部近くまで野生鳥獣が下りてくるが多くなった。その結果、近年、野生鳥獣による農作物への被害や事故などの人的被害が増えている。

ストーブや薪ストーブに使うバイオマス燃料などとして使ってみる〔寺田氏（前号）〕などの活動を積極的に進めてみてはどうだろうか（写真4）。そのような活動を通じて、改めて森林からの恵みを日々の暮らしや家庭に取り込んでいくことで、身近な森林が再び生活の一部となり、本当の意味での「身近な森林」を取り戻すことにつながるのではないだろうか。

おわりに

以上、前号（45巻2号）と本号（45巻3号）の連携特集について簡単ではあるが総括的な整理を試みた。よく知られているように、都市近郊林と里山（林）の境界線は明確とはいえないが、ある程度、区分／対比できる性格を有している。今回の連携特集は、この

2つのタイプの森林を連続して議論することで、他方を鏡としてもう一方で起きている（または将来的に起こり得る）さまざまな問題を、相対化してとらえることができるのではないかと試みであった。

その結果、もちろん都市近郊林と里山林のそれぞれ固有の問題も明らかになったが、両者に通底して、身近な森林を取りまく「無関心」の存在などもあぶりだされることになった。読者各位にとっても、両号とともに手にとっていただくことで、身近な森林に生じている問題に対して、それぞれに新しい発見があり、またより深い理解がなされること、および都市近郊林、里山林の区分の垣根を越えてそれぞれの得意とする手法や成果が共有されることがあれば編者一同幸いである。できれば、それがおのおのの現場の抱える問題の解決に役立つアイデアの発見・醸成につながることを期待したい。

なお、今回の連携特集は前号・本号に寄稿してくださった執筆者のご尽力によって成り立っている。忙しいなか、快く執筆を引き受けてくださった23名（43巻2号、12名・43巻3号、11名）の著者の皆さまに編集委員一同より厚く感謝申し上げます。

最後に、今回の連携特集がわたしたちと森林や自然との距離感を問い直すきっかけとなり、現代的で心地よい関係性が構築されることにつながれば、編集にかかわった者として大変幸甚である。



写真4 どんぐりを拾って森林の不思議を学ぶ子供たち

注) このような体験が身近に森林を感じるよいきっかけになる。大人になっても定期的に自然を訪れるかまたは林産物など自然の恵みを日常生活に積極的に取り入れることで、森林との心理的な距離が近いものとなる。